



第25号

平成八年
(1996)

10月15日発行
(年4回発行)

「転じ」と「転じ方」

東明雅

前号に「付け」と「付味」について述べたので、この号では「転じ」と「転じ方」について考えてみたい。

「転じ」は連歌の時代から受けつがれた俳諧(連句)の最大の特質で、西洋の詩歌にはまったく見られない。それ故に明治になってから「連俳非文学」という烙印を押され、文壇の表面から抹殺され、日陰の身になった。

それでなくてさえ、文学は個の文学でなければいけない、手法は写生でなければならぬと言え、それだけでも連句は否定されるであろう。この論法で行けば、西洋の音階を持つていない日本音楽はみな非音楽であろうし、あるいは陰翳のない、遠近法を知らない日本画は非絵画であろうか。

現在では、連句の「転じ」は、外国で作

られる外人の「レンク」にもそのまま採用され、「Shit」呼ばれている。日本の連歌の「付け」は炯眼なソ聯の映画監督エイゼンシュタイン(一八九八〜一九四八)によって、「モンタージュ」という新しい手法に作りかえられ、世界の芸術に大きな影響を与えたが、「転じ」も将来は外国文学に取り入れられ、貢献するような時代がないとは限らない。ところで、その「転じ方」であるが、江戸時代を通じて、いろいろな方法が考えられている。その主なものとしては次の四つである。

- ① 連歌の時代から伝わる体・用の区別に
よる方法
- ② 美濃派を中心とする人倫察情説による
方法
- ③ 江戸蕉門の付合十体説による方法
- ④ 伊勢派に流れた「付方自他伝」による
方法

以下、簡単に説明してみよう。

① 連歌では、山類・水辺・居所などの事物に体(もの本体)と用(作用・属性)の区別を付け、三句続ける時は用・体・用、あるいは体・用・体と続けぬようにして、輪廻を避けるようにした。

② 連歌では人倫(人事)の句は打越を嫌うとしていた。俳諧では二句去りであるが、

各務支考(一七三一没)はこれを再区分して、人倫を狭義の人倫、人倫の噂とした。この説を敷衍した原田曲斎の説明によれば、人倫の姿・人倫の情・人倫の用と五つに分け、それぞれが打越を嫌わないとした。狭義の人倫とは親子・兄弟・嫁婿・祖父孫など、噂とは主・誰・身など、姿とは目・鼻・耳・手足など、情とは心に思うこと述懐など、用とは態芸(職業・芸能・文学・学問など)である。

③ これは二弟準繩(一七七三刊か、摩訶庵珪山)に出ている説で、宝井其角(一七〇七没)の伝と伝える。「付合十体」の証句をあげ虚実・自他・多少・体用・氣質の五項目によって、たとえば打越が虚の時は三句目は実、またはその逆、実の時は虚となるように詠む。順逆二体、合計十体の詠み分けである。

④ 「山中問答」の附録「付方自他伝」の方法で、一六八九年頃立花北枝が考え出した方法という。一卷すべての句を人情自、人情他、人情なし(場)の三つに分け(人情自他半も人情句)、そのそれぞれが打越にならぬようにする。人情の句は一句で捨てない。場の句は二句まで続けられる。一句で捨ててもよいが、その前後が自または他(自他半)それぞれの打越にならぬようにする。

以上が従来用いられた転じの方法であるが、現代連句は早く合理的な転じの新しい手法を確立すべきであろう。

発句と俳句について 秋元 正江

発句は座の文学である連句の巻頭の句であり、俳句は座を離れた個の文学であります。

それ故、発句は一座の人の意志や感情を無視するわけには参りません。「三冊子」に、新宅の会に燃ゆる・焼くるなどの火の噂、追悼にくらき道・罪・とが、船中にかへる・沈む・浪風の類、忌むべき心遣・五体不具の噂、一座に差合ふ事思ひめぐらすべし」とあるのはまさにこの事で、一般的には発句は何を詠んでもよいという事になっておりすが、一座のその時・その場・その人によっていろいろ配慮する必要があります。

さらに発句は一卷を引っ張って行かねばなりません。一卷は序・破・急によって構成されております。序はおだやかに、破はおもしろさを尽くし、急は軽く収めるのであります。それ故、序の口にあたる発句で、あまりに凝った句、あるいは他人に異常な感動を与えるような発句を出すと、一卷の山場が早くも出てしまつて、一座の人たちは脇以下を付けて行く気力がなくなつてしまつてしよう。それでは連句の一座は成立しません。

しかし軽い句といつても、極端に俳味の濃いものはいかがでしょうか。発句でおもしろすぎると、やはり一卷の序・破・急が狂つてしまつてしよう。これに反して俳句は一卷を引っぱつておりませんから、何の制約、禁忌

もありません。あたりを気にせずどんな材料でも取り上げられますし、自分の意志・感情のおもむくままに句にしてよいのです。

女を買う話

山口 美恵

この春、イタリアのフィレンツェで三ヶ月ほど学生生活を送りました。といつても外国人にイタリア語を教える学校に通つていただけなのですが、級友は二十代から七十代、国語はドイツ、オーストリア、スイス、フランス、デンマーク、アメリカ、ロシア、韓国とさまざま。共通語は必然的にイタリア語のカタコトですが、苦しくなると、皆さん他の言葉で話したくなるらしいのです。

「ハルエ、英語が分るか?」「ノー!」「ドイツ語は?」「ノー!」「じゃフランス語は?」「ノー!」という調子。「日本では普通何語を使っているの?」「もちろん日本語」「それから?」「それだけ」「ウッソ、信じられない!」。質問したスイス人も、私も、これにはびっくり仰天。

二ヶ国語はあたり前、四ヶ国語くらい喋るのも珍しくない陸続きのヨーロッパ人の中で日本語しか話せない私が、おまけにこの年になつて、四苦八苦するのは当然、と開き直らないとやっつけません。

フィレンツェに着いたばかりの頃、ローマにいる友人に電話をする用事ができました。「もしもし(Pronto)」と電話口に出て来た女性に、「キミエさんと話をしたいのですが……(vorrei parlare con KIMIE)」と言つたつもりが口から出たのは、「キミエさんを買いたいのですが……(vorrei comprare Kimie)」。一瞬の沈黙、続いて電話線を伝わつて来る長い長い笑い声。イタリア語はローマ字読みですから試しに発音してみてもいい。

そんな私でも一寸いばる事が出来るのは日本語が話題になる時。何しろ日本語のアルファベットは五十一。それも平仮名、片仮名の二種あつて漢字は何千も・・・と言つと、二十六のABC:Zしか持たない級友は素直に感心してくれます。つい嬉しくなり、「日本にはハイクという世界一短い詩があつて、私たちはそれをつなげてレンクという詩に……」と説明していたら、イタリア人の先生が口をはさんで来ました。「ハイク? 知ってる、知ってる。世界一短いことばはつくるのも世界一簡単ということだよ、ね」。

その夜、シニョーリア広場のダビデ像をそれは見事な月が照らしていました。それなのに月の句が出来ません。どうやら、この街に生きたミケランジェロやダビンチ、ダンテ等の霊の光が乏しい私の創造力を消してしまつたらしいのです。

ゆるる季語

和田 順子

いつの時代にも伝統を重んじる保守派と、新しい時代感覚を発展に繋げようとする革新派の闘ぎあいは尽きることがない。

俳壇においても「季語の見直し」が取り沙汰され、生活の変化と共に新しく加わったり、抜け落ちてゆく季語がしばしば話題になる。そんな中で、私の身辺に起きた次の二件の出来事は、日本の伝統文芸に対する自分の考えを改めて問われる形になった。

一つは朝日カルチャーの「連句入門講座」で発句の勉強をしたときである。「あけび」「秋渴き」の席題が出され、「秋渴き」については正江先生より「秋になって急に食欲が湧きお腹のすいてくる状態を言います」との説明があった。出来た句を板書し全員で互選、先生の講評のあと質問があった。

△仮の世の間はず語りや秋渴きVの発句に関して、「秋渴き」を食欲以外の精神的渴きにまで拡大解釈してよいものか、と言うものであった。「和田さんはどう思いますか」と明雅先生に問われ、どきまぎしながら次のように答えた。

「季語として成立してきた理由が、食欲が湧くことに発しているのなら、精神的な渴きとは区別した方が良いと思います。」
拡大解釈すれば季節感が希薄になると、とっ

さに思ったのである。

反論が来た。現代の感性に合わない狭い解釈は単なるギョーカイ用語である、というきびしいものから、季語を替えて△仮の世の間はず語りや炭を継ぐVにしたらしい句になりますねー、という穏健派迄。

一般的には三島由紀夫の「愛の渴き」にまで解釈されてもいたし方ないことであるが、秋になって覚える精神的な渴きに発する季語としては「読書の秋」とか「灯下親しむ」とか、いろいろある筈である。約束ごとや制約の多い中で創る楽しさを覚えた連句人としては、やはり成り立ちを大切に次の時代へ繋げる一人でありたい。

と、思う理由にもう一つの事件があった。私の娘が中学生の時、国語の試験問題に季語を分類する設問があり、朝顔を秋の季語とした娘の答は×になってしまった。彼女は季語集をみて俳句も作っていたので、昔、桔梗を朝顔と言ったこと、立秋が思いがけず暑い八月に来ることを知って「秋」とした。しかし、これは、世間の常識に合わないことも又事実である。夏休みの「朝顔絵日記」は子供達にとってやはり夏の花である。そこでなぜ秋とされるのか、その成り立ちをもう一度考えてみる。

朝顔は万葉集巻八に憶良によって秋の七種として詠まれている。△萩が花尾花葛花撫子の花女郎花また藤袴朝顔の花V。しかし今の

朝顔の元が薬用として日本に入ってきたのは平安時代になってからで、万葉の朝顔は桔梗であったと言われる。平安時代の『和妙抄』『名義抄』には「牽牛子」「槿」が朝顔と呼ばれている。朝咲いて夕方にはしぼんでしまふはかない花が朝の兒、朝顔であることが、物語や歌などで理解出来る。実より名を優先する日本の和歌の詠み方によって「はかない花」のイメージが先行し、桔梗であったり権であったり又かきつばたであったりする。

ゆえに朝顔は秋に咲くはかない一日花のイメージで詠まれてきた。が、一方で四季の区分の問題があり、天文学上の四季、気候学上の四季、そして歳時記分類(季語)の四季とのずれが一般に朝顔は夏と思わせてしまう。

『ゆるる日本語』は池田弥三郎氏の著書であるが、言葉や季語もその時代に生きて考える人達によって選択されて変化していくことは歴史によって明らかである。

しかし、今連句と言う古典に深く根差した文芸を学ぶものとしては、せいっぱいその根っこに忠実でありたいと思うのである。もちろん現代人の感性が昔に立ち戻れる筈もないのであるが、その季語や言葉の過去を充分に知った上で現代の選択をすることが、日本文芸の「来し方行方」に携わるものつとめと思うに至った。ゆえに、私はギョーカイ人と言われようと私にとって「秋渴き」は食欲、「朝顔」は秋の季語なのである。

♪サバキ・サバクトキ・・・♪ 座の文芸である連句には「サバキ」という役割がある。メンバーの持ち味を活かすもころすもサバキ次第とも言われる重たいサバキ。皆さんほどのような心持ちでこなしておられるのか、うかがってみました。(編集部)

大それた夢

長崎 和代

始めの頃は、季題配置表を傍に、ひたすら式日に障りがないよう無我夢中。ベテランの連衆にびったり付いていた。

少し馴れてきたらそれに加えて、反古の短冊を家に持ち帰り、もしこっちの句を選んでいたら等と詮無い思案に暮れる。

そして、平成六年三月伝道書を授かり、何時までも甘えてはいられず恐るおそる舟を漕ぎ出し現在に至る。

平成三年から二十二回の捌を経験して来たが、東先生に「平凡で盛り上がらない」、又他の先生から「アピールするところが少ない」とのご批評を賜った。小さな瑕にこだわり大切なものを蔑ろにしているのではないかと反省している。

ゆったりとした雰囲気をつくり、連衆の転じの効いた句に迷いながら、私の一直で見違えるような一巻となる、そして東先生や連衆の皆さんがウーンと感心するようなそんな捌をしたいものである。

晴の日も曇の日も

今宮 水壺

捌き修練

権頭 和弥

「ねこみの通信」編集部より、(捌きをしてる時の心持ち)たとえば、①気を使うこと、②嬉しいこと、③つらいこと、等について何か書くようにとのことなので、思いつくままに書いてみます。

①の特に(気を使う)ようなことはほとんどありません。ことに猫簞では連衆の皆さんがベテラン揃いなので、分らないことは聞けばよいし、捌きのミスはご指摘いただけると、座の雰囲気はいつも上々、私の場合むしろその甘えを自らいましめるべきでしょう。

②(嬉しいこと)と③(つらいこと)、これは晴か曇か吉か凶かというような関係で、付け運びがかるやかに、座の気分が盛り上げれば楽しく嬉しいし、逆に停滞したときは少々つらいということになります。時に佳句名吟が出揃って選択に迷うことがあります。これは嬉しい悲鳴ですね。また、転じ、付味共に申し分なく、加えて私好みのユニークで軽い句が出たときには思わず快哉を叫びます。

ついでに、私の絵の仕事为例にひくと、一つの画面は様々な部分から成り立っているわけですが、その部分部分の役割による強弱、明暗その他のバランスをとっていかないと良い作品は出来ません。連句の捌きに似ています。

まず連衆の顔ぶれのよろしきことに敬意を表す。陽気、久闊などの挨拶を交わす中にそれぞれの人の人となりをも、もう一度記憶スライドを組み合わせ、スクリーンに写し出し像を定着させる。にこにここと、しぶしぶと、「座」に在るお姿を観察するのもまた大切。

女の方なら、首輪耳飾り、指輪、はては、口紅、爪の色なども、見て見ぬふりをして、じっくり眺めることも肝要。気は未だ漫ろなるも、平らかな気分上々。いよいよ一巻の、晴れ晴れとした気宇の発句が、座の雰囲気を含む。座の中の宗匠、先輩、客人からの発句、常道であるが、ただく方の筆頭とところがける。また、連衆互選により、高句から決める場合もある。付句を読み上げ、候補作を示すや否や、「飲食の打越」「気分の打越」の指摘が、すかさず出る。ああの、このの、談論風発、甲論乙駁となれば、「座」の盛り上りは最高で、はっきり申して、捌き手自身、連衆から受ける愉快さの権化となる。世慣れのサバケタ人ならずとも、連句文芸の捌き手たらんと、「連句入門」第四章「付けと転じ」を、右脳左脳が、右往左往しながら捉えようとしている、お捌き修練の以上世迷言である。

歌仙「青葉」

久保田庸子

捌

恵比須様だけ日本産なり

利

打出して月影ばかり残る寄席

瑞

さらめきて青葉揺れる愛宕山

庸子

油彩搬入蓮の実の飛ぶ

和

池のよどみに生るる蜻蛉

瑞枝

老のパスであちこち薄ら寒

同

たっぷりと鰻のたれをかくるらん

和子

保障倍増保険業界

利

週に一度はのぞく常連

利子

何とやらいつも無党派選挙戦

弥

月光の石垣浴ひの立ちばなし

和弥

穀雨なるらし佇みし縁

瑞

まるめてのばす相撲番付

和

階を埋め盡して御所の花

庸

新米をまづ土産神に供へるて

利

さんしょちりめん頼むぶづけ

瑞

恋はやさしとビデオエノケン

弥

平成八年六月十九日 首尾 於 栄立院

瑞

日曜はだめよとくらふ肘鉄砲

和

連衆 大窪瑞枝 式田和子 梅田利子

瑞

狂牛病が伝染ったのかも

瑞

権頭和弥

瑞

フランスヘユーロトンネルやとどる

利

権頭和弥

利

弗安良きとひびく口笛

瑞

権頭和弥

瑞

寒晒色よくあがる屋根の月

和

権頭和弥

和

寿墓祝ひに霰酒酌む

弥

権頭和弥

弥

六人め夢が叶ひて男の子

利

権頭和弥

利

とぐろ巻きたるFAXの紙

瑞

権頭和弥

瑞

旅行社のグルメ満載花の旅

利

権頭和弥

利

鞆の底に春ショール入れ

和

権頭和弥

和

風雅なる連句付合弥生尽

弥

権頭和弥

弥

浪ごろしてふ浜の奇っ怪

同

権頭和弥

同

足すりて赦免の船を見送りぬ

瑞

権頭和弥

瑞

夜店の地割くじにはづれる

瑞

権頭和弥

瑞

ねぐらより共に飛び立つ親鳥

利

権頭和弥

利

公園デビューためすノウハウ

庸

権頭和弥

庸

冬耕の我がふる里の坂多く

弥

権頭和弥

弥

杜氏いなせで袖を引き合ふ

和

権頭和弥

和

令夫人毛深い奴が好みとか

瑞

権頭和弥

瑞

歌仙「あちさるや」

杉山壽子

捌

あちさるや栄立院は街の中

壽子

あつしあつしと集ふ連衆

芙紗

強力足の運びに合はせるて

一恵

煙草一服岩の腰掛

麻子

水平線真赤にそめて月登る

明雅

鯊釣る舟に揚げる天婦羅

志げ子

そぞろ寒地酒の味を自慢げに

麻

二股かける恋の戦略

紗

なにさあの男は面がいいだけよ

同

世紀末には多きごたごた

雅

平凡に生きて重荷も負はされず

麻

キャロルを歌ふクリスマス・イブ

雅

凍りつく織月空に張りつきて

恵

刑事の靴のすりへりし路地

げ

帰ろうかファミリーの待つシンリーへ

同

犬といっしょにおにぎりを食ふ

雅

宰相は髪なでつけて花の宴

麻

デジタル技術あげる風船

紗

初虹の大きく渡る山七里

麻

鴉があさる無人売店

恵

核実験ひとの迷惑かまはずに

同

いねむりをするこくりこくりと

紗

着ぶくれの子供は座敷童子めき

雅

渦巻く枯葉鎮もれる窪

げ

登り窯たくましき腕見惚れるて

恵

ああじれたいこの朴念仁

壽

ひとり旅宿毎変はる夢十夜

雅

まろき月の出カリヨンの上

げ

ハムレットエイズ気遣ふ肌寒に

恵

かまどの辺り蟋蟀を聞く

麻

戦前の暮しを今も引きずって

恵

チップ弾んでひびく年金

げ

鼻高き碧眼のボーイ最敬礼

恵

本日飛行機時間正確

麻

沖繩に花はまだかと尋ねたり

紗

春の衣裳に染むる紅型

麻

平成八年六月十九日 首尾 於 栄立院

同

連衆 東 明雅 根津芙紗 山崎一恵

内田麻子 蒲原志げ子

内田麻子 蒲原志げ子

歌仙「荒南風」 中田あかり 捌

荒南風の島や古びし船着場

青光する鯖の箱詰

飾り棚カットグラスを並べて

間違ひ電話二回三回

窓際に月を見てゐる縫ひぐるみ

体育の日を待ちかねる吾子

初獵の銃の感触たしかむる

ダイエットして減りしふところ

妻よりも総て知ってる社長秘書

長い髪の毛探す助手席

縄文の遺跡に美女のミイラ出づ

腸捻転で終る国会

凍てし月喰べつ歩きつ中華饅

狐の衿巻首は後に

大舞台名題役者の連ねなり

極太ペンでサインローマ字

願はくば花追人の旅をせん

山うらうらと眉はきのごと

四月馬鹿俸鼻にもピアスつけ

テープで聞かす般若心境

碁敵は生きた死んだと石を置き

枝衰へし掏摸の親方

悠久の黄河は海に達せざる

スケスケブラを着けた抱籠

蚊帳の外捨てた女の居るやうな

狂気の画家の絵をば蒐めて

客の愚痴上手に聞きて店繁盛

あかり

千町

文子

好敏

安子

町

文

安

町

文

同

敏

文

町

文

敏

同

町

同

文

安

文

敏

同

町

文

安

不幸は線で倅は点

深閑と眠れる森に三日の月

銘柄問はず新走り酌む

ナッ
パリダカのレーサー詣る秋祭

会場いっばいドミノ積み了へ

お遣ひを命じられたらうれしげに

口笛吹きて囀に和す

廉太郎の歌碑に花びら散りしきる

武者が奴の糸を切る風

平成八年六月十九日 首尾 於 栄立院

連衆 原田千町 橘 文子 豊田好敏

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

神谷安子

三十屯船風を待ちつつ

仏典を納める箱に冬の月

宋音で読む唐詩さえぎえ

リースデーケーキの届く大使館

ロングドレスのあまた集ひて

湖の夢かたまごふ花明り

哲学を捨てさすらへる春

ナッ
下町に黒人霊歌うらげし

犬をかたへに刺繍するひと

ばばさまのリュック姿も板につき

俳句日記は八巻となり

初富士を甲斐の側より仰ぎゐて

青木ヶ原に誘ひ込まれる

聞き上手騙され上手泣き上手

ジョギングの娘を視姦する奴

珈琲の秘密苦みの奥にあり

伊語と佛語の看板が増え

居待月終の栖のダンボール

鬼の捨子の声を聞きたる

秋なすを嫁にも食はず良き姑

ゆきし弟の憶ひ出を書く

生欠伸貧乏ゆすりとまらない

見渡す限り鱗干す浜

小綬鶏のしきりに呼べる花の奥

ふらこ揺れて笑まふみどりこ

平成八年七月十七日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 東 郁子 佛淵健悟 古賀一郎

浅賀淑代 青木泉子

浅賀淑代 青木泉子

代

悟

郎

悟

泉

郁

代

悟

郁

泉

悟

代

郁

泉

悟

郎

同

郁

郁

泉

代

郁

同

弘

泉

代

同

郁

泉

歌仙「総代裃纏」 梅田利子 捌

鳩八の総代裃纏祭待つ

事の諸分を決める冷酒

糶市場出荷の束を積み上げて

電子手帳を胸のポケット

推敲の筆置けば月昇るらん

粧ふ山の裾野なだらか

蜂の子の在り処は父の秘密にて

人を煙に巻きし蘊蓄

王朝の恋の講義に魅せらるる

影無き男ダイヤナを追ふ

賽ころの丁がさっぱり出ない賭場

潤目鰯を焼く路地に月

「福は内」佐渡の豆まき「鬼も内」

共同開催さまるサッカー

激辛の漬物石を赤く染め

共産党員こつこつと説く

花守の気概に老樹蘇へり

朝寝の夢の若かりし母

泥絵具弥生狂言まねき描く

二郎四郎橋今も残りぬ

淡海のホバークラフト波立てて

ガイド操る変な日本語

夏霧の幽閉の城仰ぎ見る

美女を娼婦に変へる一瞬

きぬぎぬの托鉢僧の草鞋胼胝

音なき雨の濡らす碑

迷ひ犬学校帰りに抱き寄せ

苦情ご意見団地新聞

名月の一句なかなかも成らず

出会いがしらの蛇穴に入る

鬼灯を鳴らして婆の得意顔

自然と遊ぶ子供教室

アンティーク柱時計が時刻む

尾長の影の動く蹲

花びらを肩にくぐりぬ蹺り口

春の夕べを讀へしは誰そ

平成八年七月十七日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 今宮水壺 桑原美津 橋 文子

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

須田智恵 加藤道子 山崎一恵

月皎皎とひびく凍裂

かじけ猫主に似たる埴輪の眼

九尺二間に住みていくとせ

パソコンの世界のシヨップサーフィンす枝

器に凝ってグルメ気取れど

花の宴人問国宝囲みをり

乗込み鮒を睨みみる鷺

からからと春挽糸を紡ぐ縁

リーチをかけて数ふ点数

梗塞の心臓押さへ大統領

まどろみし間に夢を見しとか

仮面つけ聖ヨハネ祭狂ほしく

焦がれしひとと組みしダブルス

嬉しさに今日は濡れたる泣きぼくろ

黒の羽織を落とし見得切る

中京の錦小路の漬物屋

みちんに切れれば入歯嫌はず

雨の月軍歴語る刀鍛冶

そぞろ身に入む一節切の音

農継がぬ息子を嘆く芋畑

コンビニエンスとなりし雑貨屋

置き石は鳥の仕業J R

百名山の踏破終へたり

ゆくりなく花の盛りに会ひし旅

臙に浮かぶ遠き町並

平成八年七月十七日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 大窪瑞枝 権頭和弥 蒲原志げ子

倉本路子 椿 紀子

歌仙「雲の峰」

上月淳子 捌

俊寛の遠流の島か雲の峰

石垣灼けて渡る潮風

網肩に昆虫採集きりもなし

貸出図書の申込み書く

玻璃の窓月まるまると昇り来て

マッシュルームのスープ取り分け

醸したる自慢のワイン眠る地下

館を見せる領主末裔

売立ての札のついたる大寝台

隠す魔性をちらと覗かせ

母と娘で一人を想ふ曼陀羅図

月皎皎とひびく凍裂

かじけ猫主に似たる埴輪の眼

九尺二間に住みていくとせ

パソコンの世界のシヨップサーフィンす枝

器に凝ってグルメ気取れど

花の宴人問国宝囲みをり

乗込み鮒を睨みみる鷺

からからと春挽糸を紡ぐ縁

リーチをかけて数ふ点数

梗塞の心臓押さへ大統領

まどろみし間に夢を見しとか

仮面つけ聖ヨハネ祭狂ほしく

焦がれしひとと組みしダブルス

嬉しさに今日は濡れたる泣きぼくろ

黒の羽織を落とし見得切る

中京の錦小路の漬物屋

みちんに切れれば入歯嫌はず

雨の月軍歴語る刀鍛冶

そぞろ身に入む一節切の音

農継がぬ息子を嘆く芋畑

コンビニエンスとなりし雑貨屋

置き石は鳥の仕業J R

百名山の踏破終へたり

ゆくりなく花の盛りに会ひし旅

臙に浮かぶ遠き町並

平成八年七月十七日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 大窪瑞枝 権頭和弥 蒲原志げ子

倉本路子 椿 紀子

高橋 豊美

「一篇の詩は『知性』の祝祭であるべきだ。それは、それ以外のものであってはならない」そして「祝祭が終わったあとには、何も残るべきではない。ただに、灰と踏みじられた花綵と。」これは、ヴァレリーの『文学』に見える言葉だが、芭蕉の文台引き下ろせば反故なりと通うところがある。また「一篇の詩は、いつになってもでき上がりはしない」(以下引用内書)それが終わるのは外的な事情―事故―によるとしている。疲労とか、締切りとか。「『完成』それは推敲だ」そして「同一の主題とこれもほとんど同一の言葉とを果てしなく繰り返しまき返すことによって一生を満たしてもよろしいと」そう言っている。完成という概念は投げ捨てられた。

「詩は詩人が書いたものであることは確かだが、それを書いていたときの詩人は自分を忘れていたし、読んでいたときの我々も詩人のことは忘れていた。偉大な文学作品のすばらしさは、それを読んでいる人間をそれを書いていたときの著者の状態に近づけ、読者の心のなかに創作衝動を生み出すことにある。」(『無名ということ』フォスター)

二十世紀の詩人と十七世紀の俳諧師との距離は、見掛けほど遠くはない。

さてここで連句の文学性とは何か。

連句興行の座に、連衆が集う。挨拶である発句が出され、句を付けることが始まる。句を付けるには、まず前句を読む。では前句を読むという行為は何か。前句は打越しの句と共にひとつの世界を作り上げているので、前句を読み替えることが句を付けることになる。

読者⇨作者⇨読者の交錯が生まれる。

ロラン⇨バルトの言う「作品からテキストへ」(生産者である作者が記号表現を通して、個人の性向や心理に基づいてひとつの意味をもつ作品を私的に所有し、読者はそれを受動的に消費させられるのが「作品」、読者が読むことを通じて意味生成が展開される動く場であり、それ以前または同時代の種々の文化的言語活動からやってきた引用の織物が「テキスト」)がここで実現されているのであり、彼の言う「作者の詩」「読者の誕生」もここにかかると。作品としての俳句。テキストとしての現代連句。

「思考というものと言語というものがあるのではない。……我々自身の言語表現は、我々にとって思考そのものである。」(『弁証法の冒険』メルロ＝ポンティ)

ひらめくように付句ができることがある。前句の中の何かを言い当てた感じがする。意味の表面に漂っている「何か」としか言えないもの。それは軽やかな変身であって、前句を付句の言語で瞬間的に読み替えているので

あり、それが主体的な読者⇨作者の形で現れる文学的(或いは文学を越える)行為なのである。制度化された言語の惰性の中に身を置いている我々が、パロール(言葉の創造的使用)をおこなうための装置として、現代連句は優れて有効な場である。

失われた時を求めてを読む時、バッハの大きな組曲を聞く時、花咲く野辺の小道を散歩する時、私達はゆっくりと進んでゆく。見通しが効かないので、そうするしかない。未来はまだ顔を出していない。つまりここには時間が現れる。充実した時間と呼ばれるもの。

「たとへば歌仙は三十六歩也。一步のあとに帰る心なし。行くにしたがひ、心の改るは、ただ先へゆく心なれば也。」(白雙子)とある。踏み出してあともどりしないのは精神上の旅である。芭蕉は連衆をひき立て先に立つ。三十六歩は千里の道につながる。道は盡きない。すすむにつれて、景物は移り、世界はあらたまる。行くところ雅にも入り俗にも入って、運動は自在神通、変化の相は詩心の花と咲く。」(『旅』石川淳)

漂白の思いやまず、生きるとは旅することであるならば、

「歴史が私にどんな関係があるというのか。私の世界が最初の、そして唯一の世界なのだ。私は、私が世界をいかに見出したか、を報告したい。」(『草稿1914-1916』ウイトゲンシュタイン)

連句と「マイスタージンガー」のこと

日高英二

連句は疑いもなくホモ・ルーデンスが発明した最高の遊びの一つである。そして多人数で共作する詩の遊びであるから、そこに式目と呼ばれる制約があるのは当然である。しかしながら初心者にとっては、はじめその規則のもつ智慧の深さが充分理解できないものだから、往々それが自由な詩想を縛る煩瑣主義と映るのもまた止むを得ない。

詩の世界における規則と自由の問題は洋の東西を問わず普遍的なもので、ヴァーグナーの楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」(親方歌手の意)の主題もまたそうである。この類似性に気付いたのは、ACC連句教室、明雅先生の捌きによる付合演習の時であった。黒板に板書された三十余句が式目違反の廉で容赦なく消されてゆく。白墨で音高く印がつけられる。袈裟がけに斬り捨てられる。無論私の句などは連衆の哄笑の下に真っ先に絶命する。そしてこんな風に痛快な式目裁判が進んで行くうちに、私はこれと似た情景が「マイスタージンガー」の中にあつたことを思い出した。

親方歌手の一人であるボーグナーが、聖ヨハネ祭の歌競技の勝者に娘のエヴァを与えると言ったものだから、彼女と相愛の仲であ

る騎士ヴァルターはその参加資格を得るためマイスタージンガーの試験を受けることとなる。マイスタージンガーとは、勃興期の都市市民たちが発明した「歌手ギルド」の親方のことで、中世の吟遊詩人の伝統を踏まえて作り上げた煩瑣で術学的な諸規則に則り作詞作曲歌唱し得た者のみを受けられることのできる称号である。

ヴァルターは親方達の前で、即興の歌を歌う。だがその歌声と競り合うように、記録室の中から規則違反をチェックする白墨の音がひっきりなしに聞こえてくる。そして第一節が終るやいなや、記録係が×印を満載した黒板を掲げて現れる。ヴァルターは「歌い損ね、失格した」のである。しかし親方歌手の第一人者であるザックスだけはヴァルターの歌の新しさに感動し、密かに彼にその新鮮な詩想を規則に合致させるコツを教えてやり、また策略を用いて彼を歌競技に出場させる。ヴァルターの歌は民衆に大喝采をもって迎えられ彼は勝者としてめでたくエヴァとマイスタージンガーの榮譽を手に入れるのである。そして楽劇は民衆の堂々たる大合唱のうちに幕を閉じる。

「我らのドイツの親方達を尊敬しよう、そうすれば良き精霊を我がものとすることが出来るのだ・・・。」
まことに、制約の中にのみ精霊は動くにちがいない。

連句と酒 *

「月見酒」

中川 哲

月であらうが花であらうが、年中酒びたりの我が身であるが、やはり仲秋の名月は指折り数へるやうな気分がある。毎年日めくりの掛曆を買ふのも、旧曆の十五日はいつにあたるかを捜すための用意でしかない。

香港では未だに旧曆の行事がきちんと行はれてゐるから、名月の夜は家々手作りの月餅の徹宵の飲茶や麻雀が例年のことらしい。わが家と親しい若夫婦からも安否を尋る国際電話を貰ふ。
「日本人はお酒を飲み過ぎるよ、お爺ちゃん、もう止めるよ」などと、あやしくなつた日本語であけすけに諫言されるのが恒例になつてゐる。

大抵その頃は月見がてらの湯屋から帰って、文音の付句を苦吟しながら、小芋の煮ころがしを着に冷酒でとろとろの時間だから、愛想のいい返事もろくに出来ない。

猫養会案内

海音寺 潮五郎

▽ 『猫養作品集Ⅶ』 作品募集

杉内 徒司

- 形式は自由
- 一人一篇（捌きは猫養会員のこと）
- 原稿用紙は必ずB4判で
- 締切 十一月末日
- 送り先
〒二七七 柏市加賀二―十二―十一
梅田 利子 宛

▽ 猫養連句会

- 日時 平成八年一月十五日（水）
十二時より歌仙興行
- 場所 江東区芭蕉記念館

† 訂正とお詫び †

井 前号「連句と酒」中、「鰻は夏まで待つ・・・」は「秋まで待つ」に。
井 前号「季語はるかなり」の二十行目「一九六八・一二・二八（上）大阪湾」は、「一九六七」に。
井 前号二十韻「藤祭」、十九句目花の句、「報酬の続きいや増す花の酔」を「献酬の」に。

昭和三十年頃であったろうか、小山寛二君

が野村愛正先生をわが家にお連れして来た。

野村先生の名は昔から知っている。先生の小説『明ゆく路』が朝日新聞の懸賞小説に一等

当選した時（注・大正六年）私は中学上級生

か卒業して一、二年の頃であった。文学少年

だったので、はるかな片田舎から翹望したのであった。

小山君は酒客なので、当然酒となり、何やかやと歓談しているうちに、連句の話が出て、先生がこの道で一方の旗頭であることがわかった。私は独吟数巻を御覧願ってご教示を乞うた。

「全部いけません」と言われる。道理である。全然、方則を知らず、十七音と十四音とをすらすらとつらねただけのものだ。箸にも棒にもかかる道理はない。

これが私と連句宗匠としての野村牛耳先生との出会いである。以後月に一回、私の自宅で、先生の指導で同好の者が集まって連句興行をやることになった。大体一年か一年半もつづいたろうか。まことに楽しい会であった。

そのうち、私は宅を建て直さなければなら

なくなり、私が一年近くも箱根に転任したので、ぼしゃぼしゃと消えてしまった。

右は野村牛耳の半自叙伝的小説『泉は放射線に流れる』上梓の際（昭和五十年十一月刊）

私が海音寺氏に乞うて書いて頂いた序文の一節だが、豪朗連句会と称したこの集りの歌仙

は二十巻残っている。

信州伊那から上京した根津芦丈もこの連句

会に二、三回参加しているが、芦丈米壽記念

出版『この一路』には、芦丈捌歌仙「雑煮」

（昭和三十二年一月二十六日 於海音寺亭張

行）が載っている。

『芦丈翁俳諧聞書』にも、この「雑煮」に

ふれた記述がある。

海音寺潮五郎さんの所にね、一ぺん行って出勝でね、一巻やったその時にゃ、幾たりばかりだったかな、七人か八人集まった

か知らん。馬骨さんも来るとかね、南山なんて中沢丞夫そういう文士の連中、それから葱嶺なんてね（清水正二郎・胡桃沢耕史）、

鎌倉から出て来る。何しろ潮五郎さんは原

稿書きに忙しくてね。夜中まで書いて、それからまあ十時ごろでなきゃ起きない。起きるともう原稿の催促が二人、三人も来て

いてね。それだで、その時の巻も半ごろから漸く出て来て、二、三句付けたんだが、

その後潮五郎さんの家を宿にして何回やっ

たか、奥さんが嫌だというわけだ、それで宿してくれねえようになって・・・。

